



年 組 名前

# 道新ワークシート

## 本を読み、とは言わない。ただ、本があるのを覚えておいてほしい

今年で創刊45周年を迎え、本好きから大きな信頼を得てきた書評コラムマガジン「本の雑誌」(本の雑誌社)が、10代向けのブックガイドを出した。タイトルは「10代のための読書地図」。これまでも多数のブックガイドを出してきた同社だが、10代に狙いを絞ったのは初めて。「面白い本に出合えたら、必ず本を好きになる」と信じて編集したという同社の杉江由次さん(50)に聞いた。

(編集委員 高島伸一)



### 「本の雑誌」が10代向けガイド

杉江さんは同社に入社以来、一貫して、営業を担当。その中で書店員から「小中学生や、その親が『お薦めの本はないか』と、よくたずねてくる」とを知った。学校の読書時間などに読む本を探しているのだという。「書評誌を発行している出版社として、相談に答えられるような10代向けブックガイドを作ろうと思った」と企画意図を語る。

18歳まで本を読んだことがなかったという杉江さん。とにかく、「面白い本に出合っただけ」と期待する



実は杉江さん、18歳になるまで、1冊の本も読んだことがなかった。「他に面白いことがたくさんあったからかな。とにかく、親が『外で遊べ』と言ってきた、本なんか捨てられちゃった。また、学校で先生が薦める本がぜんぜん、面白くなかった」と振り返る。転換期は予備校生のとき。「親友から『こんな本が好きははずだよ』と村

上龍の『69』『愛と幻想のファシズム』を薦められた。この2冊で本の面白さに目覚めました。予備校を中退、出版社勤務を目指したが、どこも高卒の採用枠はなく、東京・八重洲ブックセンターなどでの書店員経験を経て、1997年に「本の雑誌社」へ入る。以降、営業で活躍する傍ら「受賞すると直木賞より売れ行きが良い」とうわさされる本屋大賞の創設にもかかわった。「上から目線でも、教育的指導でもなく、ボクの親友のように、ただただ、友だちに面白い本を読んでもらいたいという視点からのブックガイドにしたかった」という。

書評家で翻訳家の大森望さん、新潮社出版部の新井久幸・副部長、声優で文筆家の池澤春菜さんによる大型対談では小中高校生に100冊をすすめて

いる。そのほか、「友だち」「運動部」「こわい話」など、18のジャンルで書評家や書店員らが面白本を紹介する。さらに「本好きに送るハローワーク」「10代のときに読んでおけばよかったと後悔した本全国書店員アンケート」など、出版業界からの信頼も厚い「本の雑誌」らしい仕掛けも。「教育的な読書ではなく、純粋に本を読むことの楽しさが伝わる原稿が集まった」と杉江さん。「10代に向けてということ、筆者のみなさんは本選びはもちろん、文章も相当本気です。真剣に取り組んでもらえました。また、押し付けがましくならないよう、かなり気を使われたそうです」

「10代」と言っても、小学校高学年から高校3年生まで、世代は幅広い。「小学校高学年で難しい本を読む子もいれば、ボクのように本を読まなかった子もいる。年齢にこだわらず、薦める側が純粋に面白いと思え、読んでほしい本を取り上げることができました」と杉江さん。「本を読み、とは言わない。ただ、本があるのを覚えておいてほしい」

1980円。ちなみに同書に掲載されている合同会社未来読書研究所の田口幹人代表のコラムによると、「若者の読書離れ」という言葉が初めて使われたのは1977年のことだという。

